

新潮文庫

ブラームスはお好き

F. サ ガ ン

朝吹登水子訳



新潮社

“Aimez-vous Brahms……”

by

Françoise Sagan

Originally copyrighted by Librairie Julliard, Paris.

This book is published in Japan by arrangement with Librairie Julliard through the Bureau des Copyrights Français in Tokyo.

ブラームスはお好き

定価 90 円

新潮文庫

昭和三十六年五月十日 発行
昭和三十九年六月二十八日 八刷

訳者

朝吹登水子

発行者

東京都新宿区矢来町七一
佐藤亮一

発行所

東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新潮社

電話東京二六〇局一一一一(大代)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊦

印刷・中央精版印刷株式会社 製本・植木製本所

© Printed in Japan

新 潮 文 庫

ブ ラ ー ム ス は お 好 き

F ・ サ ガ ン
朝 吹 登 水 子 訳



新 潮 社 版

1480

“Aimez-vous Brahms……”

by

Françoise Sagan

Originally copyrighted by Librairie Julliard, Paris.

This book is published in Japan by arrangement with Librairie Julliard through the Bureau des Copyrights Français in Tokyo.

本書はフランス著作権事務所を通じ、原著作権所有者ジュリアール書店との契約に基づいて、日本に於ける独占翻訳出版販売権は新潮社が保有する。

ブ
ラ
ー
ム
ス
は
お
好
き

—
ギ
イ
へ
—

第一章

ポールは鏡にうつる自分の顔を見つめていた。三十九の年までに刻みこまれたやつれを一つ一つこまかに調べながら。こういう時よくするように、あわてたり、とげとげしたりする様子もなく、ほとんど気にしていないぐらい平静だった。顔の皺や影をはっきり見ようとして、二本の指で時々つつぱってみるこの生暖かい皮膚が、まるで他人のものであるかのようにだった。自分の美しさにばかり気をつかい、若い女の段階から『いつまでも、お若い』女の段階にはいることをいやがる別のポールの皮膚でもあるかのようにだった。彼女にはそういうポールは別人みたいに思われた。実は彼女は時間をつぶすために鏡のまえに來たのだった——この考えが彼女をほほえませた——。だが、時間こそ彼女を少しずつむしばみ、むかしは愛されたことのある自分の容貌を冒していることに気づいたのである。

ロジェは九時に來るはずだった。まだ七時だった。時間がたつぷりあった。ベッドのうえに横になって、なにも考えずに目をつぶる時間があった。神経をしずめ、休む時間が……。だが、夕方になって頭を休めなくてはならないほど、一日中なにをそんなに熱中してくたくたになるまで

考えていたのだろうか？ ポールは、あっちの部屋へ行ったりこっちの部屋へ来たり、窓のまえを行ったり来たりさせる、この落ちつかない投げやりな気持ちをよく知っていた。それは子供のころの雨の日の気持ちに似ていた。

彼女は風呂場にはいると、浴槽ゆづねのなかのお湯にさわってみようとして上半身をかがめた。そして、この動作は不意に一人の男のことを思いださせた……やがて十五年になる。そのころ、彼女はマルクと一緒にいた。かれらは結婚後二度目の夏の休暇と一緒に過ごしていた。そして、すでに彼女は、これらすべてが長つづきするはずがないと感じていた。かれらはマルクのヨットの上にいた。帆はにえきらない人の心のように、風にはたはたとゆれていた。彼女は二十五だった。そして突然、彼女は全身が幸福感に満たされてゆくのを感じた。自分の人生のすべてを甘受し、世界を甘受し、万事これでいいのだということを稲妻のように感じとりながら。彼女は、自分の表情かおをかくそうと、ヨットから上半身をのりだして流れゆく水に指を浸そうとした。小さなヨットは揺れた。マルクが、かれ独特の、無気力な視線を彼女に投げた。たちまち、彼女の内の幸福感が皮肉な気持ちにとってかわった。もちろん、その後も彼女は幸福だった。かれと、あるいはほかの男たちと……。しかし、このように完全に、かけがえのないふうには決してなかった。そして、しまいには、この思い出がはたされなかった約束のように思えてきた。

*

ロジェが来るはずだった。彼女はかれに説明するだろう、説明しようと試みるだろう。かれは、『うん、うん、もちろんだとも』と答えるだろう。かれは人生のごまかしを発見するたびにそうする、あの一種の満足感をもって言うだろう。ロジェは、人生の不合理な面について話すべき、ひどく熱心にしゃべるが、それでいながら、この人生をつづけてゆくことに執着していた。ただ、ロジェの場合、それらのすべてが、やすむひまもない生活力と、はげしい欲望と、そして、実際には、かれが眠る時までつづいている、生きることにたいする深い満足感によって埋めあわされていたのである。だから、ロジェは、眠るとき、ひと息にぐっすり眠ってしまうのだった。手を心臓のうえにおいて。そして、目ざめている時とおなじぐらいに自分の人生に気をつかつているのだった。いや、ポールは、ロジェに、自分が疲れていて、掟おきてのように二人の間におさまるかえっているこの自由——かれだけが用い、彼女にとっては孤独としてしか映らないこの自由にはもう我慢ができないと説明することはできないだろう。そして、自分が時どき、ロジェの大きな、あのとげとげしい所有欲に満ちた女たちとおなじように感じることはあるとは言えないだろう。突然、ポールは、自分のがらんとしたアパルトマンがひどくいやな無意味なものに見えた。

九時に、ロジェがベルを鳴らした。かれにドアをあげながら、ちょっと太りぎみのロジェが戸の前で微笑しているのを見て、彼女はもう一度あきらめをもって、かれが自分の運命であり、自分がかれを愛している、と思うのだった。

「いい服を着ているなア……君がいなくて寂しかったよ。ひとり？」

「ええ、おはいりなさい」

「ひとり……？」彼女がもし『いいえ、あなた悪いところに来たわ』と言ったらどうするだろう？ しかし、六年このかた彼女は決してそう言ったことがなかった。ロジェは彼女がひとりかどうかきき、そして訪ねてきたことにたいしてあやまることもしばしばあった。彼女はそういう策略を、かれの気まぐれ以上に非難した。（ロジェは、自分のために彼女が寂しがったり、不幸になったりするという考えすら認めることができないのだった）彼女はロジェに微笑した。かれはお酒の口をあけると、二つのコップになみなみと注いで、腰をおろした。

「そばおいで、ポール、どこへ夕食をたべに行こうか？」

ポールはかれのそばにすわった。かれもやはり疲れた様子をしていた。ロジェは彼女の手をとると、ぎゅっと握った。

「ごたごたがいっぱいあってねえ」とかれが言った。「ビジネスはつまらないし、ほかのやつらは頭が悪くてだらしがないことおびただし。あああ！ ねえ、田舎^{いなか}で暮らしたらいいだろうなア……」

彼女はわらいだした。

「きつとあなたのベルシー河岸^{がし}や、倉庫や、トラックがなつかしくなるわよ。それからあなたのパリの長い夜が……」

最後の文句にかれはちょっとわらった。そして伸びをすると、寝椅子^{いす}の上にあおむけにひっくりかえった。ポールは振りむこうとしなかった。彼女は、自分の手のうえにあるかれの手を見つめた。大きな、ひらいた手を。

彼女はかれの全部を知っていた。額の下のほうまで生えている密生した頭髮や、ちよつとびだしたかれの青色の瞳^{ひとみ}のきりっとした表情や、かれの唇^{くちびる}のすじまで、なにもかも、そらで知っていた。

「それはそうと、ぼくの馬鹿^{ばか}さわぎっていえば、このあいだの晩、子供のようにお巡^{まわ}りにひっぱられたんだよ。喧嘩^{けんか}をやったんだ。四十すぎて……警察なんかへね……考えてもごらん？」

「なぜ喧嘩^{けんか}なんかしたの？」

「おぼえていないのさ。だが、相手はひどく参^まってたよ」
そして、あたかもこの肉体のデモンストレーションの思い出がかれを活気づけたかのように、ロジェはいっきに立ちあがった。

「どこへ行くか決めた。ピエモンチアにしよう。その後で踊りに行こう。ぼくが踊れるって認めてくれるんなら」

「あなたのは散歩だわ。踊ってるんじゃない」とポールが言った。

「みんながそう思っているってわけでもないよ」

「あなたが征服したかわいそうな女たちのことといっているのなら、話は別だけど」

かれらは笑いだした。ロジェの浮気は二人の間の笑い話のいい種だった。ポールは、階段の手すりに手をかける前に、ちょっと壁に寄りかかった。彼女には元気がなかった。

ロジェの車のなかで、彼女はうわの空でラジオのスイッチをひねった。彼女は、ダイヤルの目盛板の青白い光に映った、自分の細長くて、手いれの行きとどいた手をちらっと見つめた。静脈が手の甲にひろがっていた。静脈が指をつたって入りくんだ模様をえがいていた。『私の人生のイメージだわ』と彼女は思った。そしてすぐにこのイメージは間ちがっていると思いたおした。彼女には好きな仕事があった、悔いのない過去があった、いい友達がいた。それから長続きのする情事があった。彼女はロジェのほうを振りむいた。

「私、何度この仕草をしたことかしら？ あなたの車のラジオをつけてから、一緒に夕食をしに行くという……」

「知らないな」

ロジェはポールのほうをちらっと横目で見た。長い年月と、かれにたいする彼女の愛情に確信を持ってはいいたものの、かれはポールの機嫌きげんに驚くほど敏感だった。そして、いつも用心していた。はじめのころのように……。ポールは、『ねえ覚えている？』というような言葉をおさえて、

今夜の自分の感傷的な気持ちになるべく用心しようと心に決めた。

「古くなったと思う？」

「いいえ、私のほうよ、時どき自分が少し古くなったと感じるのは……」

ロジェはポールのほうに手をさしだした。彼女はそれを両手のなかに握った。かれはスピードを出していた。見なれている道が車の下へどんどん吸いこまれて行った。パリは秋の雨にぬれて光っていた。ロジェが笑いだした。

「どうしてこんなに飛ばすんだろうかと考えていたんだ。若者らしく見せようとしているのかもいけないねえ」

ポールは返事をしなかった。彼女がロジェと知りあうようになってから、かれは若者らしくふるまい、じじつ、かれのほうが『年下の男』だった。そのことをロジェが彼女に告白してからまだ間もなかった。そしてこんな告白をされること自体、彼女にはこわかったのだ。理解や愛情を持っていることで、自分がいつしか聞き手の役にまわるようになったことが、だんだんおそろしくなってきたのである。ロジェは彼女の人生のすべてだった。

かれはそのことを忘れていた。そして、彼女のほうも、かれにそれを忘れさせるようにしむけていたのである。

二人は静かに食事をした。ロジェのやっているような運輸会社に共通の悩みについてしゃべってからポールは、装飾の仕事をしている店のおもしろい話を二つ三つ聞かせた。ファットのとこ

ろにくる客がぜひと自分のアパルトマンの装飾をポールにやってくれというのだった。かなり金持ちのアメリカ婦人だった。

「ヴァン・デン・ベッシ？」とロジェがきいた。「聞きおぼえがあるなア、ああ！ そうだ……」ポールはまゆを上げた。ロジェは、なにか思いだすときにするような、たのしそうな顔つきをしていた。

「まえに知っていたんだよ。戦前に、たしか……。いつも『フロランス』にいたんだが」

「その後、結婚したり離婚したり、いろいろあったらしいわ」

「うん、うん」とかれはほんやり考えながら言った。「なんていう名前だったかな……ええと……」

見ていてポールはいらいらしてきた。彼女は突然かれの手のひらにフォークを突きたててやりたくなった。

「彼女の名前なんか興味ないわ」と彼女は言った。「かなりのお金持ちで、ぜんぜん趣味がないらしいわ。私の小づかいかせぎにちょうどびったりな条件よ」

「今いくつぐらいだろう？」

「六十代でしょ」と彼女は冷たく言い直った。

そして、ロジェの表情を見てふきだした。かれはテーブルごしに前にかがむと、ポールをじっとみつめた。

「君って本当にひどいね。なんとかしてぼくをすっかりさせようとばかりするんだから。それでもぼくは君を愛しているんだ、だがほんとは愛すべきじゃないね」

ロジエは被害者ぶるのが好きだった。ポールはため息をついた。

「ともかく、私、あすクレベール街に行ってくるわ。私、早急にお金がいるのよ」ロジエが手をあげたので、彼女は「あなたもね」と明るくつけ加えた。

「ほかのことを話そう。どこかに踊りにいこうよ」

キャバレーで、かれらはフロアーから離れた小さなテーブルに席をしめると、無言のまま、行きすぎる人びとの顔をながめた。ポールの手はロジエの手のなかにあった。彼女はすっかり安心して、そして、すっかりかれになれきっていた。だれかほかの男を知ろうなどという気持ちには、すこしもならなかった。そして、このような安定感が彼女に寂しい幸福感をもたらし、そののだった。二人は踊った。ロジエはしっかり彼女を抱き、フロアーの端までなんのリズムもなしに横ぎった、ひどく自分に満足した様子で……。彼女はとても幸福だった。

しばらく踊ってから、かれらは車で帰って来た。ロジエは車からおりると、玄関先で彼女を両腕に抱いた。

「おやすみ、じゃ明日ね、恋人よ」
モン・ユリ

かれは軽く彼女に接吻すると立ちさった。彼女は手を振った。ちかごろ、かれは彼女の部屋まであがらずにお休みをいうことが多くなった。彼女のアパルトマンはがらんとしていた。彼女は

ベッドの上に腰をおろす前に、きちんと身のまわりのものを片づけた。両眼に涙をいっぱいためて……。彼女はひとりだった、今夜もまた……。残された人生は、決して皺しわになることのないシートと、長わすらいの単調な静寂さにも似た孤独な夜々の、いつはてるかもしれぬ連続のように思えた。彼女はベッドのなかで、そこにだれかの暖かいからだがあるかのように本能的に腕をのばした。彼女はだれかの眠りをさますまいとしているように、ひっそりと呼吸した。一人の男か、一人の子供、だれでもいい、彼女を必要とする人、寝つくときと目ざめのときに彼女のぬくもりを必要とする人を。しかし、だれもほんとうに彼女を必要としている人はいなかった。もしかしたらロジェが……。だがかれは、思いだしたときにしか来ない。心の底から彼女を必要としているのではなかった。ポールが求めているようにではなく、情熱的にでもなく、時どき彼女が感じたように、まったく生理的に。彼女はゆっくりと、にがにがしく孤独を噛かみしめていた。

*

ロジェは自宅の前に車をおくと、かなり長いこと歩いた。大きく息をすって、少しずつ歩幅をのばしていった。いい気持ちだった。ポールに会うたびに、いい気持ちになるのだった。かれはポールしか愛していなかった。今夜だけは、別れぎわに、彼女が悲しんでいるらしいと感じたが、なんといつていいかわからなかったのである。ポールは漠然とかれになにかを求めている。かれ

がボールに与えられないなにかを、かれがだれにもやることができなかつたなにかを……かれはそのことをよく知っていた。

たぶん、彼女のそばに残って、一緒に寝るべきだったかもしれない。それが女を安心させる、いちばんいい方法だった。しかし、かれは歩きだつたのだ。夜の町を歩きまわり、ぶらついてみたかつた。石畳の上の自分の足音を聞き、すみずみまでも知っているこの都会を見まもりたかつた、そして、もしかしたら、夜のアヴァンチュールに出会うかもしれない。かれは河岸のはずれに見える明りにむかつて歩きだした。

第二章

あくる朝、彼女は寝すごした。からだの節ぶしが痛かつた。彼女は大急ぎで家を出た。事務所に行くまえに、アメリカ婦人のお客の家へ寄らなくてはならなかつた。十時に、彼女はクレベール街の半ばがらんとした客間に通された。家の女主人はまだ寝ていたので、彼女は鏡のまえでゆっくりと化粧をなおした。鏡のなかに、シモンがやってくるのが映つた。かれはだぶだぶの部屋着をきて、頭をくしゃくしゃにし、すばらしく美男子に見えた。『私の好きなタイプじゃないわ』